

第七式典・式辭

第一章 入学式・始業式・卒業式

第一節 式辞・訓辞・挨拶

四五八一 私立哲学館始業式館主井上円了演説

(明治二六年九月一六日)

井上館主演説

本日は副島閣下並に朝野の貴顕紳士の来臨を辱うし茲に哲学館第七学年度始業式を挙行するに至りしは館主たる拙者に於ては申迄もなく、本館一同が感謝に堪えざる所なり、されば余は其の不弁をも顧みず聊か我が館創立以来の来歴及び本日此の式を挙ぐるに至りし次第を一言すべし

抑も哲学館は今を去ること恰かも七年以前文科大学速成教授の目的を以て開きたる者にして当時或は法科学の速

成教授を目的とする私立法律学校即専門学校専修学校、英吉利法律学校、明治法律学校等の如き種々これありと雖も未だ之に對して大学分科中の文科の速成教授をなすべき者は一も之なき有様なれば哲学館は即此目的を以て設立し文科の簡易学校若くは速成学校として世に知らるゝに至りしなり即ち今若し文科大学に入らんとするには先づ高等中学の数年の科程を履まざる可らざるも哲学館にては此順序を履まずして地方にありて普通学を修め終れば直に文科大学同様の学科を修め得るの捷徑(近道)を開きたるなり次に哲学館創立以来如何なる目的を有する者多く此の学校に入学するやを考ふるに主として教育家及宗教家の二種最も其大部分を占むるものゝ如し故に本館は此教育家に對しては先年文部省にて施行されたる教員檢定試験の準備をなすことゝし且つ此教育家の爲には雷に教育学によりて学理の研究をなさしむるのみならず、尚実地に近かしむるの必要を感じ教授法若くは学校管理法等の如きも既に前年度より其講義の開くに至り益進んでは

終に附属小学を設るの必要を感じたるも幸に近辺に小学校多ければ之と連絡を通じて其実修に取り掛らんとするの計画をなし居れり次に宗教家に対してはこたび幸に府下に説教会の組織せらるゝありといへば之によりて演説説教を練習せしめ以て實際の道を開かんことを企て居れり此等は本館が入館者に対して取る所の方針なりされど学科としては勿論文科大学の速成簡易の性質を失ふことなく且四五年以前よりは茲に更に一の目的を加へ文科大学の普通教授のみならず尙東洋専門学校を起さんとの企望を世に公にしたる次第にては余か欧米漫遊の砌東洋哲学の彼の諸国に盛なるを見て大に感ずる所あり帰朝後は早々此旨意を發表して終に東洋専門学校開設の端緒をなすに至れるなりさり乍ら之を開かんとするには一には輿論を喚記して其の之を起すの必要な所以を世人に訴へ第二には多少の資本即学校の経費を支ふべき資本を得るの道を講せざる可らず依て熟ら考ふるに自ら全国を周遊して四千万の同胞に此の旨を告ぐるに如くことあるべからずと即ち三年前より終に全国巡遊の途に登りそれより以来今日迄凡三年地方にあること実に四百日即ち殆んど一年一月其巡廻の場所是一道一府四十八県演説せし場所は二百廿ヶ所に達し演説の回数実に八百十六回の多きに及びたり換言すれば此等の場所に於て此等の諸地に

於てかく八百余回の演説を以て東洋専門学校設立の今日に必要な所以を世人に訴へたるなり而て今日迄此主意に賛成して寄附者に加名したる者殆んど三千人にして金額は總計七千円に登れり此七千円の資本果して能く東洋専門学校設立の目的を達せしむるに足るべきやといふにそれは固より能ふべくもあらずさり乍ら既に今日迄の成績より之を測るに今より五年十年乃至二十年の後に至らば必ず此企望の達せられ東洋専門学校の開かるゝは期して俟つべしと自ら信じて疑はずされば本年度よりは現在の学科を改良して一年／＼に多少其の程度を進め終には他日専門科開創の暁に到らんとの計画ありて殊に本年度よりは会計科の一科を設けて以て専門科開創の準備に着手したりしかして本日^{（今日）}の始業式は即ち此の東洋専門学校準備の始業或にして毎年の始業に異なりて別に貴賓の來臨を仰ぐに至りし所以なり

扱此専門科所謂東洋専門学校とはそも如何なる者ぞといふに之を分て日本学支那学印度学の三部となす此三学は共に千有余年来我が国に存じたる所にして実は日本学なり故に之に支那学印度学等の名を与へずして国学儒学仏学と称し之を専門に研究する者にして東洋専門学校狭くいへば実に日本専門学校といふべきなり然るに本日三千人の賛成者の力によりて幸に此準備の始業式を挙げ貴顕

紳士の来臨を辱うし得るに至りしは他の言葉にていへば
 実に本館の主義を賛成せる三千人の賛成者に対して此式
 を挙行するに至りし者といふべし然らば余は今特に賛成
 諸君に対して深く其の厚意を謝せざるべからず本日は文
 部大臣及び次官にも御臨席の筈なりしも至急の事故によ
 りて御高臨なきは遺憾とする所なれども幸に副島伯以下
 諸紳士の此座に臨まれしは不肖なる拙者は勿論なほ三千
 人の賛成者のために謝辞を述べざるべからず聊か本館の
 来歴次第を一言して一は御高臨の諸士に謝し併せて三千
 人の賛成者の厚意に答ふるなり

(加藤井上両博士の演説筆記は論説の部に合せり)

『天則』第六編第四号 (明治二六年一〇月一七日)

四五八―二 私立哲学館始業式副島種臣祝辞

(明治二六年九月一六日)

副島伯祝辞

本日哲学館第七学年度始業式ヲ举行セラレ予ニ一言ヲ微
 セラル予聞ク哲学館ハ帝国大学中文科大学ノ普通ヲ教授
 シ東西ノ哲学史文学ヲ兼修スル目的ヲ以テ創立シ漸ク
 進テ他日東洋専門大学科ヲ開設セントスト是豈一大盛事
 ニアラスヤ館主井上^四了氏^五胆勉此事ニ從ヒ自全国ヲ周遊

シ遍ク世ノ有志者ニ訴ヘ我邦諸学ノ淵源ヲ尋ネ以テ家^六國^七
 永遠ノ基趾ヲ鞏クセンコトヲ図ル而シテ本年ハ本館設立
 ノ七年度ニシテ加フルニ本学年ヨリ漸ク学科ノ程度ヲ進
 メテ専門大学科ノ準備ニ着手セントシ本日其始業式ヲ挙
 行ス是亦一大美挙ナリ予豈祝セサルヘケンヤ夫レ一国独
 立ノ思想ヲ涵養セント欲セハ其國固有ノ学ヲ振興セサル
 ヘカラス其國固有ノ学ヲ盛ニセント欲セハ其学ノ由テ起
 ル淵源ヲ窮メサルヘカラス本館ノ目的ノ遠大ニシテ且國
 家ノ独立ヲ維持スルニ力アルコト已ニ知ルヘシ故ニ予ハ
 唯生徒諸子ニ望ム遠ク将来ノ大成ヲ慮リテ時風ニ走ラス
 深ク学理ノ蘊奥ヲ叩テ速成ヲ期セス以テ異日國家有用ノ
 材タランコトヲ聊一言ヲ述ヘテ以テ祝辞ニ代フ

『天則』第六編第四号 (明治二六年一〇月一七日)

四五八―三 私立哲学館始業式加藤弘之演説大意

(明治二六年九月一六日)

●哲学館始業式演説 (大意筆記)

文学博士 加藤弘之

先刻井上館主は哲学館の来歴に付て演説せられしか如
 く、本館の創立につき且つ其後今日迄漸次盛大に至りし
 は井上館主の尽力は実に非常といふの外なし、此の非常

の尽力を以て今日の盛大を見、なほこれより一層高きに進まんと企望を以て一ツくぎりに、本日此の式を挙くるに至りし次第なりといふことなるが、哲学館の主義につきては是迄既に明なるか如く、従来我が国人の西洋の学術を取るに唯取るといふことのみ主義となりて、之れを日本に同化せしめて日本のものとするの運に至らざりし故、井上君は茲に慨する所ありて、終に哲学館を開くにも及びしことなるか、凡そ学問も欧米の学を取るといふことを以て、唯一の目的とすることは進歩の最初には免るべからざる順序にて、已むを得ざることゝはいへ、漸く進むに随ては勢我か国に同化せしむべくとの論に至るべきは必然にして、唯取るのみにては効の甚た少きみにあらず、時に或は害となることもあるべし、然らば学問も宗教も其の一切のものを取るや、常に日本のものとする考を離るべからざるは勿論にして、余は大に井上君の此の學を喜ぶものなり、次に井上哲次郎君の東洋にも哲学なきにあらず此等の諸學は皆學者の研究を要するものなりとの説は、館主と同意のことにて、固より余の賛成する所なり、然るに世人近來の吾邦の學問を見て、口に空論をとなふるを非とし、漸く実業論の喧しき有様となれりこれ亦余の同意する所にて、眞の文明は決して理論を口にするのみにて得らるべきものにあらず、

必ず実業的の學盛に開けさるへからざるは固より明なり、さりながら若しまたひたすら実業のみに意を注ぎ、生活の本を立つるのみを以て學問の目的とするに至らば、其の間違なることを俟たざるべし、然るに世の所謂実業論者は或は此の傾きなきにあらず、かゝる人々は皆思へり、口に説く所の理論は國家經濟の上に関係なくんは不必要或は有害なるものゝみと、然れども実業家が所謂不必要或は有害の學問は決して眞の學問にあらず、僅に數部の西洋書を読み或は翻訳書を読める位の學問のみなり、今日世間の學者と云ふ中にはケ様の人多きか故、自ら実業家の偏僻の反對も出づるに至る次第にて、亦理の當然なるべし、然れども一意此の如き論を推し立てゝ生活上に補助とならぬ、學問は總て之れを無益とし殊に哲學の如きは最も今日に迂遠なる不必要なる學問なりと云ふに至りては余の甚た取らざる所なり、尤も西洋にては実業の盛なること勿論なりとは云へ唯実業のみ盛にして毫も哲理を知らざるが如き國は決してあらざるなり、理論と実業の二つは常に相応じ相携へて國の進歩を促すものなり、然るに我が國にて唯実業のみを目指して単に其の方に進まんには其の害最も少からざるべし、思ふに我が國の開けは西洋の開けの如く、漸次に得たる結果にあらずして外國の開けを取り、一頓に開けたるもの

なれば一時は全く我が人心は総て西洋人の心となり、西洋人を見ること神の如く我が固有の風俗を保存し国体を維持する考ひは全く地を掃はんとする有様となるに至りしが、今日は稍此の勢ひを挽回するの傾きあれども、一般の上に於ては未だ決して右の思想除去せられたりとはいふべからず、斯の如き我が国の状態にして日本の特質を保持し、西洋の学問を同化せしめて我が有となさんと考の甚だ少き時に際して、ひたすらに実業論をととなへば実業を盛にするはよし、然れども日本人の気象我が日本といふ觀念を薄からしむるを如何にすべき、西洋人の実業を盛にせんとするものは皆自国の利益をはかりてなり、然るに我が国人は唯西洋人を尊びて西洋人の実業を摸するも西洋人自身の所謂自国の利益をはかる精神を取らずしては、実業も決して左程喜ぶべきにはあらず、封建の古へには狭きながらもなほ自国てふ觀念に富みしも、今は全く之に反する時勢なれば実業論の土台に哲学にて国家の觀念を養成すること実に必要なり、天下の人をして皆哲學者とならしむることは固より能ふべからず、またさることは反て害あり実業家は無論理論家よりも大数を占めざるべからざるは明なれども、基礎土台に於てかゝる理論学の確乎たるあれば実業も其の上に建ちて始めて安然たるを得るものにて、多少哲学的の眼を以

て学問するときは事物の道理にくらからざれば、自国国家の觀念も増進するに至るは必然なり、然るに僅かに昔しの学などを種として之れに少しく西洋学をしたりとてそは却て西洋学のために圧せられ、西洋人の奴隸となるの外なし、今日は朝野共に皆此の有様なり、彼の或は国権回復せざるべからず内地難居を許すも我が国人は決して西洋人に敗を取らずなど唱説するもの、果して皆な実に我が国を愛して此の言をなすにやと見るに、決して然るにあらず、況んや此の人々は亦敢て学問の素あるものにもあらず而して軽々国家の大事を論断して怪まざるは実に危険といふの外なきにあらずや、故に余の望む所は道理に明にして理屈を言ふものゝ世に多く輕薄なる理論を唱ふる輩を却ぞけ、我が風俗国体を維持して学問を我が国の有とし併せて実業をも進めんといふにあり、若し此くの如くならざれば独り実業のみ盛なるも眞正の理論の土台なくんば危きこと限りなし、一人にても眞の眼ある理論をいふこと今日には実に必要なは此れなり、されば余は大に井上君の挙を賛し聊か祝辞として一言を述べたる所以なり、

扱次ぎに上の論とは全く關係なく別に余は生徒諸君に一事の望むべきことあり、蓋し本館生徒中には所謂宗教家特に仏教家の甚だ多数を占め居るが如くなるが、余は此

等の人々に一言せんと思ふなり、近來仏耶の争世に喧しきことなるが余も仏耶の間には大に怪底ありて、固より耶蘇教と仏教との段の非常に差異あることは自ら知り、仏教は哲学的にして耶蘇教は宗教なり然しながら仮令仏教は哲学的なりとはいへ、仏の哲学は万世不易にして一ツも誤りなしと思ふは甚だ固執の嫌ありといふべし、今を去ること既に二千年三千年前の人の口に出でし哲理が既に円満完備にして、今日より何万年の後に至るも毫も此の外に出づる能はず仏教は実に増すべからず、減すべからざる不足なき哲理なりといふは誰人にも信ぜらるべきことにあらず、されば今學問をなさん人は仏法として守る所は仏の言に背くべからざるも、哲理としては眼中仏も捨てゝ唯虚心平氣に道理のみを見ざるべからず、哲学上より尊きものは唯真理にして、仏にはあらず宗教としては仏は勿論尊けれども道理の上よりは仏と仏にあらざるとは問ふべからず、宗教は信仰を本とすれども學問は研究を主とす、仏教は耶蘇教にまされりとも仏教は總て真理を円満せりとは決して云ふべからざるなり、故に余は望む學問をなすの眼中寧ろ仏をも耶をも捨てゝ、ひたすらに真理の研究を主とせられんことを、

『天則』第六編第四号（明治二十六年一〇月一七日）

四五八一四 私立哲学館始業式井上哲次郎演説

大意（明治二十六年九月一六日）

●哲学館始業式演説（大意筆記）

文学博士 井上哲次郎

哲学館は既に館主の前に述べられしか如く、全然東洋学の振興を企図せらるゝ者なりといへば、余は今聊か簡単に東洋学につきて余の企望する所を一言すべし、欧米諸國に於て近來東洋諸学の盛なることは、実に館主の言の如く東洋諸國のことを穿鑿するものゝ中、例へば支那なればシノロギー（即ち漢学）埃及なればエジプトロギー（埃及学）亜西里亞なればアッシリオロギー（亜西里亞学）等種々の名称を附せられ、研究頗る盛なれば、今後或は日本の諸學もチャパノロギーとして研究さるゝの日もあるんか、先づ今日にては日本學は支那學の内に含蓄されて研究せらるゝ有様なり、其の他印度學に至りては更に一層盛にして、輒近に及び独逸仏蘭西英吉利澳大利の諸國にては東洋學校を建設して、東洋諸國の事を研究し、なほ漸々大學内にありても教授の東洋學を教授するものあり、伯林大學にては少くとも支那學の教授一人ありて、常に其の講義を開けり、或は教授其の人に乏しきかため

未た之を開くに及ばざるものも多く、以太利の羅馬にては現にバレンチャレニ氏の日本学を教授するあり、此外東洋古今の事に關したる著述は陸続として世に出され我が日本の事に關しても歴史上美術上に応ずるものは勿論、地質動物植物等の穿鑿に至るまで其の結果を出すことに実に夥たしき有様なり、之れを要するに東洋の事は今日にては大に諸国学者の研究すべきものとなりしなり此の狀態より見ても東洋学の一概に捨つべきものにあらざることを知るに足るべく、よし東洋諸学の說中誤謬の考の其中に雜れるありとするも、そはまた歴史上に於て十分の価値を有するものにして、何故にかゝる說の此時に起るべかりしやを考ふるも、学者の務めとすべき所なり、就中古代の哲学宗教的思想に至りては、一層深く索尋すべきものにして、或は天文学、本草学の如き形而下の學問も歴史上の価値はなしといふべからざるも、哲学宗教に比するときはなほ／＼極めて価値の少なきものといはざるべからず、特に此哲学宗教につきては其の支那印度に於ける發達は彼の欧米の新国に比するに驚くべき暗合を見出すこと少からず、尤も希臘の如きは欧州の古国なりとはいへども、支那印度の如きも決して希臘よりも新国なりとはいふべからず、或は寧ろ旧国ならんと想はるゝなり、(古代のことなれば時代を比較せんことは頗る

困難なれども)しかして彼の希臘に起れる哲學者か思考したりしことは、東洋人も亦之を思考し居たりしに似たり、且つ最近の哲学上の問題なる必然論と自由意志論との争の如きも、支那にては古人より既に争となれるものにして、即ち天命論と非命論の戦は(こは全く自由意志論と必然論の争と同じとはいふべからざるも)既に周の時に於て始まりしものなり又功利説に至りては管商の學派既に之を唱へ、次に唯心論即ち現象世界の一切は凡て一心中の影像なりとの説は西洋近來の說にして此の説は東洋特に印度には頗る古昔の說中に之れを見出すべく、支那にても莊子荀子王陽明の如き皆多少此の考を有したりしが如し、此等のこと今一々枚挙すること能はずといへども茲に最も著しき一の例証とすべきものは、即ち絶対の觀念これなりとす、此の絶対の觀念は印度支那及び西洋近世哲學者の說との間多少の差異なきにはあらずといへども、大体上殆んど同一なりといふも不可なることなし、カント、シュッペンハウエル、ハルトマン、スペンサーなほ稍古代にも哲學者中此の考ありしものなきにあらず、即ち現象世界をして依りて發表せしむる本原実體あるべしとの万有本体の說にして、此の実體之れを絶対と名くるなり(絶対の名称に就ては異論あるにもせよ)近來の哲學者は漸々此の考に傾くの状態あり東洋

にても既に易には大極と説き、一切の世界の現象は皆な之れより發達するといひ、單純より複雑に進む所以を述べたるは、即ち実体より現象の開發する所以を述ぶるものにして、其の所謂大極とは万有の実体これなりとす、老莊も亦一切の現象は種々の差別あれは之れを有といひ、有名といひ此の差別の有或は有名は無差別的実体即ち無或は無名より出づるものなりと論ぜり、而して此の所謂無と儒教の大極とは根本的思想に、多少の異点なきにあらずるも、全体の考は互に相等しといふも不可なることなし、特に印度にありては此の觀念最も精密にして、仏教の真如の如きは即ち此の例証とすべきものなり、眞如は万有的の実体にして決して人性的のものにあらず、若し人性的のものならんには、最早眞の万有的のものといふこと能はず彼の社会の未だ發達せざる蒙昧の時代にありては、自然の勢力を以て人間の如く思考し、風嵐波の如き総て恐怖すべきものは皆人性を附して之れを神としたりしが如く、人性的の実体は仮令有形を離れて無形となれるも、なほ人性を脱却すること能はざるが爲め遂に神怪を免れず、欧米の宗教即ち基督教は即ち是れにして之れを高尚の域に進ましめたるものは、哲学者なり、而して東洋人の実体の思想は皆実に此の人性を離れて万有的なる深遠の境に迄及びたり、なほ東西暗合の一とし

て驚くべきは仏教の因果律の上に其の教を建てたることはなり、今日の学者は學術を総て因果の上に建設して因果以外のものは一切妄想迷信として、之を却ぞく、例へば化学の試験を施さんか、其の試験の結果時により場所により常に變化して一律ならず、其の試験たるのむに足らざるや勿論にして、必ず先づ茲に因果の原理を予想して然る後試験も觀察も出來得るなれば、一旦定まりし理法は他國に至るも未來に至るも、決して變ずることなしといふに至り、始めて學術の根本こゝに確立するに至るなり、これ皆因果律の貫連するあるによるなり、此の因果律は即ち仏教の因果律と同一物なり然るに欧米の宗教即ち基督教は因果以外にして、人性的の神ありて人事に干渉するが如く思惟し、近來は頗る此の区域を脱せんとするの傾向あるも未だ到底全然除き去るに至らざるは勿論なり、此くの如く東西両洋の諸學を比較するに東洋學の研究は決して學者の忽諾に附し去るべきものにあらず、これ晉に宗教上哲學上に於ての大効益たるのみならず東洋學者として東洋の諸學に光りを添ふこと能はざるは実に東洋人の一大恥辱なり本館幸ひにして、東洋學研究の道を開かんとす、これ余の大に賛成する所にしてなほ世人も共に此の學を助けて其の盛大なるに到らんことを企望に堪へざるなり、

『天則』第六編第四号（明治二六年一〇月一七日）

四五九 私立哲学館始業式公爵近衛篤磨祝辞

（明治二八年九月一六日）

本館ノ創設豈ニ偶然ナランヤ後進ヲ誘掖シ帝國ノ文化ヲ
賛育セントシ今ヤ学科ヲ分チテ教育宗教ノ二科トシ以テ
大ニ帝國ノ隆運ヲ図ランコトヲ期セリ是レ余カ喜ンテ祝
スル所以ナリ惟フニ國ハ独武ヲ以テ立ツベカラス又独文
ヲ以テ興スベカラス文武ノ二道相待ツテ經國ノ基ヲ成セ
リ帝國ハ戰勝ニ依リ勇武ヲ外ニ輝シタリト雖モ文化ノ実
未タ内ニ挙ラズ文化ノ実ヲ举ケントセバ教育宗教ノ力ニ
依サルベカラス教育宗教ノ力ハ能ク帝國百年ノ隆運ヲ致
ス所以ノ道ナリ故ニ先達ノ教養ハ以テ國ノ文野ニ関シ後
進ノ奮励ハ以テ家ノ汚隆ニ繫ル前途其任重且大ナリト謂
フベシ諸子斯ヲ努メヨ

「哲学館始業式」（『東洋哲学』第二編第八号、

明治二八年一〇月二日）

四六〇 私立哲学館第十六年度始業式館主

井上円了講話（明治三五年九月一六日）

日本にて私立学校の最も古きものは慶応義塾なり、之に次くものは早稲田なり、哲学館は又之に次ぐ、国学館は更に後なり、尚他の方面に於いては攻玉舎あり、済生舎あり各法律学校あり、然れとこれ本より類を異にす、いふべき限りにあらず、たゞ私立学校の各益完全の域に達せんとするは大に善し、我か哲学館の如きも日を追うて完全に進み、特に大に奮はんとするなり、今年新入学者の比較的増加せし如きもとより教育思想の普及に依るべしといへども又我か館の完全に進むものなるを証するものなり、

さて、諸子のために一言すべきことあり、大凡学を為むるに二つの方針あるべし、一つには高尚なる議論を極め、學術の蘊奥を究るむこと、一つにはその研究せしことを直ちに実行し応用すること、これを爲の二大方針なり、換言すれば、一は理論の方面に属し、一は實際の方面なり、深く學理を研究すること、その学得せしことを事業の方面にあてはめるといふこの両方面は、決して分岐すべからず、必らず併行せざるべからず、今何れの学校も多くは理論的の一方面にのみ偏するの傾きを有す、彼の帝国大学及大学院の如きは無論もとより、深く學術の蘊奥を極むべき所、即ちもとより理論的なり、本館は創建以来今日に及ぶまでも、學術の方面は無論のこと、な

ほこれを実用の方面にあてはめる方針を取り来れり、今日以後もなほ此の方針を改めざるべし、出来得る限り高く深く學術の蘊奥を極め、之と同時に又実用の方面を顧みざるべからず、本館に教育部宗教部の設けあるはこれのためなり、

實際の方面を忘れざること、実用的なことは、古来東洋學の特色なり、もとより理科學の実用といふことはなかりきといへども、高尚深遠なる哲學の実用応用は古來今その盛を減せず、彼の支那哲學、孔孟老莊の教の如き、學としても甚た高尚深遠なりしが、その目的とする所は、いづれも世道人心にありて、曾て少しも応用の方面を忘れざりき、高尚なる學理を研究するのみならず、なほこれを實地に應用せんと力めたることは、實に東洋學術の特色なり、印度及び日本の如きも亦皆是也、仏教といひ婆羅門といひ數論派といひ勝論派といひ、常に少しも實用を離れず、印度の宗教の如きは、惑を解き人の心を安するを以て其の帰着とせり、尚仏教の如きは、高く深く世界の本体、人心の本源を究め、無限なるもの絶對なるものを討尋し、かつこれを世道人心にあてはめんとしたるなり、

之に反して西洋には、東洋學に劣らざるほどの高尚なる哲學ありといへども、多くは理論にのみ傾きて、實用を

省みず、その學益完全に近ければ益實際を離れんとす、カント然り、ヘーゲル然り、東洋の實際方面を疎んせざるに反して西洋は常にとゞ理論の一面に傾けり、これ蓋し東西の凡ての境遇事情の然らしめし所なるべきか、たゞ彼の耶蘇教の如き深く世狀に鑑みるありてか、頻りに人倫道德の事を論議す、然れども、東洋學に比すればなほ理論の方面に傾く、古來東洋にては哲學は常に實用應用を離れざりき、宗教といひ教育といふも實は哲學の應用にすぎず、かの今の宗教教育をして現狀に適せしめんには現狀に対して一段の改革を要す、これ實に大事業なり、本館是に鑑みて、今日の大勢に適せしめんとす、即ち深奥なる哲學を研究すると共にその實用をも研鑽せしめんとす、而して學を為むる亦もとよりかくの如くならざるべからず、

教育も宗教も實は哲學の應用なり、決して學問を離れたるものにあらず、今や教育普及せりといへども、それは實は精神的にあらずして機械的なり、本質的にあらずして儀式的なり形式なり、此等は決して替むべきことにあらず、むしろ改善せざるべからざることなり、今の宗教も亦甚儀式的なり、畢竟教育家宗教家の余りに神經質なるによる、實に今の宗教家教育家は、小なる枝末の事によるみ拘々として却て大事を忘却し去らんとす、これを改む

るは吾人の任務也、かつて某教育家は書を寄せて次の如き問題の如何に解決すべきかを問へり、曰はく、こゝに郵便局の消印なき書状を受取りたりとせんに、この消印なき切手は如何に処分すべきかと、今の教育家は、かくの如く神經過敏なり、又、能州巡回中、或宗教家は問うていはく、葬式法要等を勤むる時、布施の多少に依りて、読むべき聖經の多寡を推定するに苦しむ、如何にせば則ち可ならんかと、今の宗教家はかくの如く苦心す、なほ今の教育家の形式的なるを示す唯一の実例は、勅語捧読式なり、之を名けて儀式教育といふ、今の宗教は、習慣宗教なり、葬式仏教なり、お水神道なり、おみくじ神道なり、此等是非共大なる改革を要す、

然らば如何なる形に於いて、改革を行ふべきか、これ今後の教育家宗教家の潜心すべき問題なり、今の形式教育習慣宗教を改め、これをして今日の大勢に適應せしむることこれ吾人の責任なり、思へば本館の責任も亦偉大ならずや、

更に今日の状態を見れば、そは文明なりといふといへども、機械的物質的たるにすぎずして、精神的方面に於いて欠けたる所少からず、これをして完全ならしめんためには、到底儀式形式のみを以てすべきにあらず、教育に伴ふに宗教を以てせざるべからず、教育宗教両者の契合

は、此に於ける最も必要な条件なり、本館従来力をこゝに致せること多し、なほ此の方針を以て進まんとす、本館の望実に遠大なり、学理は深く高く研究せざるべからず又、之を広く實際に活用せしめざるべからず、

既に深奥なる学理を研究して、これを実際に応用せんとするに方りては、決して自分一個を標準とすべからず、必社会多数を標準とせざるべからず、自己と同様なる少数の人の智識を以て標準とすべからず、彼の智識少き多数の人を如何すべきかを思ふべし、木戸公の詩にいへる三千余万奈蒼生の句は、教育家宗教家の一日も忘るべからざることなり、井上哲次郎博士の宗教論の如き、高きことは高しといへども、恰も富士山の絶頂に於いて怒号するに殊ならず、多数平凡のものと少しも相関することなし、壮なりとも何にかせん、宗教家教育家は彼の多数の低き人民を如何にすべきかを思量せざるべからず、越中の大岩山には、行基菩薩刻の不動明王を安置す、此の像、眼の病を療すといふを以て、眼病の者群聚し日夕祈念すること怠らず、彼等一心不乱に唱へていはく南無大悲大聖不動明王、南無大悲大聖不動明王と、而して更に他を顧みることなし、これ実に迷信なり、笑ふべきなり、然れども、彼等に向つて直ちに迷信なりとするは大に非なり、笑ふものも亦大に非なり、一笑に附し去るが

如きは、与に語るに足らざるものなり、まづ彼等は何故にかゝることをなすかを、その人のその場合その心になりて考へざるべからず、これ宗教家教育家の最も大切な事柄なり、その人はその外に何のなすべき法をも有せざるが故に然する也、笑ふべきものにあらざりて、むしろ憐むべきものなり、かくの如き多数の人をして如何に安心せしむべきかと、これ第一の問題なり、少数のものは今日の教育を受けて進歩したる智識を有すといへども、多数のものはなほ少しも文明の恩沢を蒙らずして空しく迷信に支配せらる、なほ富士山は既に曙光を受けたりと雖も、平地は夢なほ穩なるが如し、この尚夢穩なるを貪るが如き多数の人民を如何にすべきかはこれ実に宗教家教育家の問題也、あゝ三千余万蒼生を如何せん、この多数の迷信家を如何にせん、

かつて富山市に火災起り、全市凡て烏有に帰せり、此の時地方の人民相語りて曰はく、日清戦争の時、天狗我兵を助け遂に清に勝てり、然るに戦終つて後、国民その天狗を祭らざりき、是に於いてか天狗憤りに堪へず、遂に火を放ちて日本人を苦しむと、これ実話なり、我國の文明の程度は実にかくの如きに過ぎざる也、諸子は決してこれを忘るべからず、この無限なる多数の人民を感化誘導して文明の域に達せしめざるべからざるはこれ諸子の

責任なり、この愚かなる多数の人民を如何に教化開導すべきか、

福沢翁かつて汽車の中にて、富士道者を嘲弄せる紳士を警められたることありき、諸子は決して今日日本がなほかゝる多数の所謂凡俗によりて満れてあることを忘るべからず、

彼等は実にかゝる浅ましき有様にあるなり、あゝ如何にすべき、この多数の愚民を如何にすべき、三千余万蒼生を如何これ実に諸子の第一の問題にあらずや、

彼の倫理道德も亦是哲学応用の範圍に属す、個人の道德は頗る發達せりと雖も、公共道德は頗る欠如たり、公德養成の声、一時は実は大なりしと雖も、今や亦將に忘れられんとす、諸子は身を以て範を示さざるべからず、実業道德も今甚しく輕んぜらる、これ実に我邦実業の發達せざる所以なり、本館これよりこの実業道德の方面に關して、將に大に尽すあらんとす、諸子亦これに潛心して可なり、これを始業式の辞とす、

『哲学館第十六年度始業式』（『東洋哲学』）

第九編第一〇号、明治三五年一（〇月五日）

四六一 東洋大学始業式大倉邦彦学長訓辞

(昭和十二年一〇月)

時局と学生—始業式訓辞—

(一)使命と目標・時局の大観
本日爰に始業式を挙行致しまして、元氣に充ちた諸君を迎へ、今学期に勇躍奮励の意氣込を誓はんとすることは、御同慶の至りに存じます。

暑中休暇の間に、日本は一大事変が突發致しまして、今や国家総動員の体制下に、全国民を挙げて非常な緊張裡に国歩を進めて居るのであります。

今更事新しく申上げるまでもなく、今次の日支事変は、単に表面にあらはれたる毎日排日に対する応報手段であるばかりではない。其のよつて来る原因を尋ねれば日本の發展進歩に対して諸外国の既成概念が之を阻止せんとする反映である。従つて事變の解決如何は、帝國將來の消長を決定する重要な意味を持つて居るのであります。

かゝる國家の重大時に際して、諸君は將來國民の精神指導に任ずるといふ責任を帯びて、勉強修養の途次にありますのであります。従つて國家が諸君に期待する所洵に

重大なるものがある事に鑑み、日本の使命と大局的立場に省み、大所高所より視野を広くして、諸君の本務に精勵する覚悟を固むべき秋であります。諸君と殆んど同じ年輩の同胞幾多の皇軍精銳は、彈丸飛雨の中に身を挺して君國の爲めに戦つて居る事を思へば感慨無量であります。之を思へば、諸君の如く最高の学府に籍を置いて勉學中の青年学徒が、晏如として日を暮しては、申訳なき次第と云はなければなりません。

此時に當つて我々は非常時の覚悟と緊張とを以て本務に最善の努力を致すべきであります。

(二)大学教育の眼目

人間の陥り易い弊害は、自分の属する世界に安住して日本と云ふ大局から見れば、取るにも足らぬ事柄をば問題として取上げ、論難攻撃排他相剋を繰返して、視野を狭からしむるといふ事でありませう。そのために、大使命に向つての進歩を妨げ、立後れの結果は、遂に衰頹を招くと云ふ場合が非常に多いのであります。

本大學の大目標は護國愛理の精神を体得せる人物を輩出す事でありませう。学祖の建學精神に基く大使命を明瞭に自覚再認し、大目標の下に摩擦相剋を解消して、本學の興隆、引いては新日本建設の爲めに一致団結して精進すべき秋を迎へてゐるのであります。

それが為めには人格と学力と識見とを具備する事を条件とするのであります。本学はかゝる意味での指導的人材を、国家興隆の為に輩出せんとする大眼目を持つてゐるのであります。

大学令によりましても三つの点を挙げて居ります。即ち大学は學術の研究と、人格の陶冶と、国家思想の涵養の三点を挙げて居ります。然るに一般都下大学の現状は国家思想の涵養又は人格的薰陶と云ふ考から離れて、たゞ専門の學術を学ぶことのみを以て、大学教育なりと考へた傾向が無いでもなかつたのであります。この点に關して、高等教育が近來世間一般から幾多の批評を受けたる事否むべからざる事實であります。然るに本学は既に当初に於て護國と愛理が明示されて居ります。此の護國愛理は人格の上に盛られなければならないのであります。近來都下幾多の学生の生活は、不規律放縱でありました。其の生活態度は寧ろ一般人にも劣るとさへ見られて居る程で、自然學生に対して敬意を払ふ事が減じたばかりではなく、遂に大学卒業者の採用をさへ躊躇するに至つた事は悲しむべき事実と云はなければなりません。近來の若き人々が生活の嚴肅味と規律とを嫌がる様になつたのは、近來の惡平等の思想と自由放任の習慣から來たものと思はれますが、然しそれは日本人本来の民族

的性格ではないのであります。律儀があり、礼儀に正しいと云ふのが日本人の本性であつて、これは日本に於て不朽の道德的価値を持つものであらうと思ひます。

特に本学の如きは、眞の宗教家、教育家たらんとする指導的人材を輩出せんとする以上、世間の何れよりも一層際立つた品格を作ることが、先づ第一に必要であらうと思ふのであります。それが本学の眞の目的たるのみならず、引いては全日本の大学改善の一指針となり、先驅となる事を思ふ時に、眞に感奮興起しなければならぬ責任を覚えるのであります。この事に省み、諸君は、私生活に於ても、能く學生たるの自分を自覺自重して、自ら紳士たるの感を他に与へる程でなければならぬのであります。

(三) 護國愛理

重ねて申します、學祖の建学の精神は、五十年後の今日、この時勢に即して益々之を強調し高揚する事の必要を痛感するものでありまして、かくする事が總て國家に貢獻する所以であると信ずるのであります。護國愛理の學は本学永遠の生命、無限の力であります。

世間は稍々もすれば、或者は愛理の一面のみを説かんとし、或者は護國のみを強調せんとして、却つて災を招く事實さへあつたのであります。が、本学に於ても、護

國と愛理との一如の精神を忘れ、何れか一方を欠如する様な事があつたならば、それは実に本大学の生命を奪ふものである事を銘記しなければならぬのであります。護國愛理一如の精神は、不肖が就任当初より共鳴措く能はざる所でありまして、今後一層、諸君と共に此學是を實踐して天下に叫ばんとする所であります。

四 時間の充実

次に重要な事は學力の充実でありますが、之にも一層の努力を要すると考へます。それが爲めには年限の延長をも称へられる程であります。が、一休學生が學校に於て學ぶ時間は何れ位あるかと云ふことを調べて見ますと、日曜休暇を除いて教授講師の休講もありますし、學生の欠席等を差引きますと、当然与へらるべき授業時間は正味幾何もない状態であります。怠慢も甚しいと云はなければなりません。

かくの如くしては、四年五年の過程を経て、それは規則上の紙に記された年限に過ぎない事になつて了ふのであります。

之等の点に就いて、真摯謙虚な態度を以て、素直に出直す決心を願ふものであります。

五 新講座に就いて

近來、大學教育が、分科し専門化された事は、著しく

學問の進歩を促したものであります。一方それに伴ふ弊害は、實社會の要求と余りに遠く遊離した点にあるのであります。苟くも實社會に立ち、殊に教育者たらんとする場合に於ては、現在の大學教育では、余りにも片手落ちの感を免れないのであります。例へば法律經濟の學を修める者は、精神科學の何たるやを解せず、一方精神科學を専攻する者は、法律經濟の常識さへも与へられてないと云ふに至つては、融通の利かない者として世間から批評されても止むを得ない訳であります。従つて卒業後の活動場面が自ら限られて居るのであります。精神科學を學んだ本學卒業生の如きが、各方面に活動の地盤を求めなければ世は法律經濟の世となつて、道の國日本を誤らしむる結果になるのであります。

この点に考を致しまして、本學卒業生が教壇寺院より更に進んで、社會教育者として広く世間に雄飛する爲めの準備が必要であると感じましたので、福利教養講座と滿洲講座の新講座の開設を計画したのであります。

先には、本来の學問の充実を強調し、又爰に新講座を開設しました事によつて、今後諸君の學ぶべき時間が非常に増加し、負担も加はつて忙がしい事であらうと思ひますが、それは諸君自身の生きんとする道であり、本學を興隆せしめんとする努力であり、引いては日本をして

本来の道の国日本たらしめんとする為めの精進である事を思つて、益々勉勵されん事を衷心切望して止まないものであります。

始業式に当り一言以て御挨拶に代へ、諸君の奮起を促す次第であります。

『躬行』第四四号（昭和二年一〇月一日）

四六二 東洋大学始業式大倉邦彦学長訓辞

（昭和一六年一〇月）

学生諸君に望む―始業式訓辞―

学長 大倉邦彦

諸君は二ヶ月に亙る鍛鍊期間中、それ〴〵の生活を通して、仕事を通して心身共に鍛鍊更新したに違ひない。特に、東京を離れ、学校を離れて郷里に帰つた人々は、環境によつて、しんみりとした雰囲気に入り乍ら、知らず識らずの間に深く心に感じたものがあつたと思ふ。殊に地方の引緊つた時局色と父母の慈愛とは、一層心に刻み込まれるものがあつたに違ひない。

人間は、如何に強がりを云つて居つても、必ずしも自分の生活を完全なものとは考へてゐない。時々は心私かに、より完全な域に達したいと考へるものである。たゞ

勇気を欠く事と、実行に入る劃期的な機会を持たない事の爲めに、往々成行きに推移し勝つものである。その意味からして、この新学期の如きは、反省と勇気を新たにして努力を決心するに最もよき時期である。徒らに周囲をのみ見廻す事の代りに、深く自己を省察しつゝ、今の時を見なければならぬ。時局の進展と之に即応する国民の動きは、随所随時に感じられた事と思ふが、本学に於ても曩に護国会を結成して、学友会の再出発を企図したのであつた。そして文部省の示達によつて、運営しつゝあつたが、その方向変換は伝統慣習の爲めに多少の支障を免れなかつた。兎角する間に、時局は更に急速に進展して早や第二段の体制が整へられなければならなくなつた。過般文部省より大学専門学校に要望された報国隊の新組織がそれである。

護国会は旧来の因習を破つて、学内を教職員学生が俱学俱進の一元の修練組織とする学校別の単位組織であつたが、報国隊は臨戦体制下に於ける銃後防衛の実践活動隊である。護国会で修練せる学徒が、報国隊によつて時局即応の実践活動に進まむとする新組織である。両者は一にして二、二にして一の二本建である。既に文部省の命令一下、過ぐる八月十八日より十日間、赤羽の陸軍兵器補給廠に動員を受けて活動した都下並に近県の本学学

徒は延人員一千人に達した。今後、同様の活動が或は生産拡充に或は消防衛生隊として諸君に期待されてゐるのである。かゝる真摯なる行的活動と学問の研鑽は併行して為されてこそ、学徒の正しい就学態度といへる。諸君も学と行と生活とは、三位一体として、三本の縄を撚つたやうに、何れを欠いても、完全なものではないことを自覚するであらう。教育は学校の教場にのみあるのではない。況んや旧来の因襲に捉はれて、狭い専門の事のみを至上として、他を顧みないといふ態度は、この際はつきりと清算すべきである。現にこの専門至上主義の弊は世上各般に指摘せられて、その革新が要望せられてゐる。即ち各専門の学も、文化施設も、運動競技も之を貫くに国体の筋金を以てして、克く国家目的に即応して専門の機能を發揮しなければならぬ。教学の刷新といふも、眼目はこゝにある。つまり、教学の教とは、我が国体に即した教であつて、それは常に国史の成跡に鑑みて^{〔聖〕}克く国礎を培養し国民を錬成するものの謂である。之を基底として深く専門化してゆく所に学の真意義があることを忘れてはならない。こゝに鑑みて、不肖就任以来、行学一致を叫んだのであるが、未だ完全にはその実現を見る事が出来なかつた。そして学問する事によつて、生の中に学生としての行は含まれてゐるであらうとか、生

活は学問とは切離されてゐるもののやうな感じを脱し得なかつた事は遺憾とする所であつた。外部からの情勢に押されて動く代りに、先覺的に実践する事によつて、容易に且つより多く効果を擧げることが出来る。何時も、押され／＼て進む者は、落伍者の運命を余儀なくされるであらう。

本大学の使命とし特色とする所は、活学の研鑽である。時代を指導し率先して時弊を矯正するだけの氣魄と実行力を養ふべき事は、今日迄再三諸君に要望して来た所であつた。それは最早今日は時代の要求と迄なつて来た。御座なりで易きに就かうとする輩を排斥して善導し得ないならば、東洋大学の使命を解せざる者と云はなければならぬ。

『東洋大学護国会々報』第三号

(昭和一六年一〇月三一日)

四六三——私立哲学館卒業証書授与式館主井上

円了演説(明治二三年七月一五日)

○井上館主演説大意

唯今卒業証書ヲ授与致シタルニツキ一言申述ベマシヨウ
今回ハ哲学館創立以来初度ノ卒業ナレハ其式モ從テ盛大

ナルヘキニ時節柄ヲ憚リ節儉ヲ本トシ極々質素簡略ニ致シ講師ノ外ニ別ニ來賓ヲ招カザルコトニ定メタルニ此炎暑ニモ拘ラズ幸ニ講師諸君ノ來臨ヲ辱ウシ卒業式ヲ挙行スルコトヲ得マシタハ卒業生一同ノ仕合ナラント存シマス卒業生ハ合計二十三名ニシテ之ヲ小別スレハ其中十九人ハ三年間在学シテ毎学年ノ試験ヲ全ウシタルモノ四名ハ二年間在学シテ特別ニ三年間ノ試験ヲ受ケタルモノデアリマス此卒業生アルヲ見テ本館創立以來滿三年ヲ經過シタルコトガ分リマス此年月ノ間本館力漸々隆盛ニ移リ今日卒業生ヲ出スニ至リタルハ全ク講師諸君ノ尽力ト有志諸氏ノ厚意トニヨルコトヲ喜バネバナリマセヌ然ルニ本館ハ今日ノ進歩ヲ以テ止マルモノニアラス又今日ノ盛大ヲ以テ足レリトスルモノニアラス今後一層進テ之ヲ盛大ニセントスルトキハ兎テモ二人ノ尽力勉強ニヨリテ能クスヘキコトデアリマセヌ必ス衆人ノ賛成協力ヲ俟ラネバナラス今卒業ノ諸子ニハ或ハ府下ニ留マリ或ハ地方ニ散スルモノアルモ今後ハ各適応ノ業務ニ就キ從來学ヒ得タル所ノモノヲ実地ニ応用サル、ハ必然ノコトナレハ永ク本館ノ精神ヲ記憶シ広ク本館ノ主義ヲ拡張シテ本館ノ為メニ力ヲ竭クシ本館ノ為メニ隆盛ヲ謀ラレンコト希望ノ至リニ堪ヘマセヌ本館ノ主義精神トハ何ゾヤト云フニ是レハ小生ガ常々申述べタルコトナレハ更ニ説キ明

カスニ及ハヌコトト存シマス方今学校多シト雖モ真ニ日本独立ノ学ヲ起サントスルモノアラソ西洋ヲ教フル学校ハ西洋ニ僻シ日本從來ノ諸学ヲ教フル学校ハ又其僻スル所アリテ日本ト西洋トヲ兼学シ二者ヲ折衷參酌シテ日本独立ノ学ヲ興スヲ以テ目的トスルモノハ此哲学館ノミデアリマス其学科ハ日本從來ノ諸学ヲ基本トスルモ其基本ヲ養成スル材料ハ広ク欧米各国ノ学ニ取ルヲ以テ西洋ノ性質ヲ帶フルモノハ必ス一タヒ日本性ニ變質シ日本ノ古形ヲ守ルモノハ必ス是レニ由テ今日ノ事情ニ順応シ始メテ我邦独立ノ学ヲ振起スルコトガ出来マス小生ガ卒業生諸子ニ記憶セラレンコトヲ望ム所ハ主トシテ此点ニアリマス是レ小生ガ卒業証書授与式ニ際シテ一言セント欲セシ所デアリマス

「卒業証書授与式」(『哲学館講義録』第一期)

第三年級第二二号、明治二三年七月二八日)

四六三——二 私立哲学館卒業証書授与式内田周平

祝辞(明治二三年七月一日)

祝 詞

内田周平

私は今日この式場に臨み諸君が満腹の喜びを以て卒業証書を手にせらるゝを見まして誠に欣抃に堪へませぬ

私も久しく書生を致しましたが初め外国語学校と申す所で独乙語を二三年学び尋で大学医学部に這入りまして予科本科とも併せて七年許り医学を修めました然るに私は語学校でも卒業証書を貰はずに医学部でも卒業証書を貰はずに兩度とも途中で止めて仕舞ひました是れは自分で覚悟をきめて止めたのであります但し併し手に何んにも取らず即ち空手^{カラ}で退学すると云ふは余り愉快に思ひませぬ「卒業証書を貰はぬのは愉快でない」と斯う思ふに付きまして卒業証書を貰つたらば定めて愉快であらうと云ふ感じが私に於ては殊に深うあります今日諸君が目出度卒業証書を受けらるゝを見まして私自らも卒業証書を貰つた様な心地が致します

世の中に親ほど子を思ふ者はありませぬ私は十年の間書生を致しましたが不幸にも卒業証書を貰うことが出来ませんでした卒業証書を貰つて故郷に帰り年の老ひたる両親を慰むることが一度も出来ませんでした今諸君は何等の幸でありますか三年の間苦学の功が積みまして諸君の王とも称へらるゝ此高尚なる哲学を卒業して雄々しく故郷に帰省なされます諸君が携へらるゝ品物の中でその最も結構なる帰遣^{キヤザ}は即ちこの卒業証書でありましよう想ふに諸君の親達はこれを見て必ず悦ぶてありましよう如何ほど悦ぶてあらうと私は察します

私が教師となりましたのはこの哲学館が始まりで私が多くの生徒を教授すると云ふはこの哲学館が始まりで而して私の与^{アツカ}つて教授した生徒が這樣に打揃ふて卒業証書授与式に列するのを見ますのは実に今日が始まりであります私は実に愉快とも欣喜とも申す辞がない位であります

「本館記事」『哲学館講義録』第一期

第三年級第二二号、明治二十三年八月八日

四六四 私立哲学館卒業証書授与式館主井上円了

演説（明治二十六年七月一日）

本館ハ明治廿年九月之ヲ創立シ帝國大学中ナル文科大学ノ速成ヲ期シ併セテ東洋諸学ヲ講究スル目的ヲ以テ学科ヲ制定シ尋テ専ラ教育家宗教家ヲ養成スルノ方針ヲ取り入学者日ニ月ニ増加シ其勢年一年ヨリ漸ク隆盛ヲ見ルニ至レリ已ニシテ余窃ニ時事ニ感スル所アリテ俄ニ欧米漫遊ノ途ニ就キ年ヲ越エテ婦朝^婦シ直チニ学制改正ニ従事シ且ツ将来ノ目的ヲ定メ従来ノ学科ヲ總シテ普通科ト改称シ其上ニ国学漢学仏学三科ノ専門部ヲ置キ東洋大学科即チ日本大学科ノ組織ヲ開カンコトヲ期シ其旨趣ヲ天下ニ発表シ先ツ資金十万円ヲ募集セント欲シ同志勧誘ノ為メニ單身立テ全国周遊ノ途ニ上リ本年六月迄巡回シタリシ

国々ハ

一道 一府 三十二県 四十八ヶ国

滞在シテ演説ヲ開キタル場処并ニ演説ノ度数ハ

二百二十一ヶ処 八百十七回

一回ノ聴衆平均五百人ト仮定スレハ四十万余ノ人ニ以上ノ旨趣ヲ演述スルヲ得タリ而シテ資金募集ノ結果ハ先キニ創立費トシテ積立テタルモノヲ合算スレハ左ノ如シ

哲学館創立費金參千貳百貳拾參円參拾五錢

寄附者三百四十五名

専門科資本金六千七百九拾四円九拾壹錢參厘

寄附者二千八百八十九名

合計金壹万拾八円貳拾六錢其中専門科資本金ハ大蔵

省預金局ニ預ケ置クコトニ定ム

斯クシテ余ノ全ク地方ニアリシ日數ハ前後合セテ四百日即チ一ヶ年一ヶ月余ナリ故ヲ以テ近年多ク旅中ニ日子ヲ消費シ館内ノ監督教授モ思ヒナカラ其責ヲ充タス能ハサリシハ実ニ遺憾トスル所ナリ而シテ其結果未タ予定額ノ十分一二達セスト雖モ本年九月ヨリ地方旅行ヲ止メ終年東京ニアリテ専ラ館生ノ監督学科ノ改正ニ力ヲ尽クシ漸次ニ課程ヲ進メ數年ヲ出テスシテ先キニ予定セル専門科ヲ開設セントス云々

「哲学館証書授与式始末」〔天則〕第六編第一号、

明治二六年七月一七日

四六五 館主井上円了英国に在りて哲学館

第十三回卒業生に告ぐ

〔明治三六年五月三〇日〕

天涯万里の外にありて遙に諸子の卒業を祝す、唯遺憾なるは本年に限り余が其席に臨むこと能はざる一事なり、されど余も歐洲大陸の巡見を了り、昨今英国にありて帰航準備中なれば遠からず諸子と相会するの日あるべし、楮昨秋以来余が不在中、本館は其筋より意外の御沙汰を蒙り、多年、忠孝為本、国体為先の方針を取りながら斯る事あるは実に遺憾の至りに堪へず、之れが為に諸子の中には方向を失ひ居るもの尠なからざるべく、其迷惑察するに余りあり、余も此事を聞き一時の驚愕は言ふまでもなく、其後と雖も夜来風雨声、花落知多少の感あれども、己れの力にて奈何ともすること能はず、唯余は此累を忠実なる諸子の上に及ぼせるを惘然に思ふの余り、遺憾の涙自ら禁すること能はざるのみ、爾来余英国にありて此国民が世界の歴史上偉大の功績を立て国勢民力共に第一の位置を占むるは其原因何れの点にあるやを熟考し、帰する処自治自立の精神に富めることを発見せり、

されば諸子も今より大に感憤し深く自立の精神を養ひ日夜奮勵努力あらば他日の成功は期して待つべきなり、而して日本臣民たる上は朝夕忠孝の大道を守り寸時も皇運を扶翼するの義務を忘れざる様余の深く熱望する所なり、

終りに際し一言以て講師諸君の懇切なる御教授に対し諸子と共に大に謝せざるを得ず、殊に本学年は一層講師諸君の御厚意を煩はし幹事の尽力を得たるは余が謝すること此の如し

明治三十六年五月三十日 在英国

哲学館主井上円了

「哲学館第十三回卒業証書授与式」(「東洋哲学」)

第一〇編第八号、明治三十六年八月五日)

四六六 東洋大学卒業式大内青巒學長訓辭

〔大正五年三月三〇日〕

訓 辭

本日恭ク本大学本学年ノ卒業式ヲ挙行スルニ遭ヒ謹テ教職員諸先生ノ敦厚ナル尊勞ヲ謝シ又既ニ卒業セラレタル学生諸君ノ慶幸ヲ賀シ併テ將ニ新学年ニ入ラントスル

諸君ノ益々課業ニ景福アラントヲ祝スルコト甚々切ナリ

然ルニ迂叟宿痾尙ホ未タ全癒ニ至ラス遽ニ走リテ教壇ニ立チ親ク諸君ト相見エテ卑意ヲ述ルコト能ハサルヲ憾ム仍テ其ノ梗概ヲ筆録シテ以テ専ラ卒業諸君ノ錦旋ヲ送り併テ留学諸君ノ前程ニ資セント欲ス亦但一片婆心ノ己ムコト能ハサル者アルヲ以テナリ近來修養ト云ヘルコト頗ル流行シ到ル処ノ講演ニ諸家ノ著述ニ之ニ関スルモノ甚タ多キハ畢竟時世ノ要求然ラシムルトコロ以テ世道人心ニ資スルトコロ鮮少ナラサルヘキハ尤モ老懷ノ喜フ所ナリトス然レトモ今時流行スル所ノ修養トイヘルコト之ヲ古來慣用セル修ノ字ノ意義ニ比シテ聊カ老懷ノ満足スルコト能ハサルヲ覺ユル者ナキニ非サルナリ

思フニ往時修養トイヘル語ノ多ク用ヒラレタルコト有リヤ否ヤヲ知ラス修身ト云ヒ修道ト云ヒ修學ト云ヒ修行ト云フカ如キ是レ其ノ往時多ク慣用セラレタルトコロ之ヲ今時ノ漫然修養ト云フニ比スレハ皆其ノ意義ノ甚タ適切ナルモノアルヲ覺ユルナリ

蓋シ修ノ言タル修繕修復修理等ノ修ノ字是レ其ノ本義ニシテ家屋ノ新ニ築造セラル、ヤ内外百般輪煥ノ美闕ルトコロナシト雖モ星移リ物變リ漸ク闕損スルトコロアルニ及ヒテハ之ヲ整理シ補成シテ以テ其ノ旧ニ復セシムル之

ヲ修繕ト云ヒ或ハ修復ト云フカ如シ今夫レ人ノ世ニ処シ
生ヲ全ウスルヤ其ノ道タル誠ニ須臾モ離ルヘカラサルモ
ノアリテ存ス然レトモ人欲ノ私ニ障碍セラレテ輒モスレ
ハ離ルヘカラサルニ離レ即クヘカラサルニ即クヲ免カレ
ス此ニ於テカ之ヲ整ヘ之ヲ補ヒテ其本ニ復ラシメサルヲ
得ス中庸ニ謂ユル道ヲ修ムル之ヲ教ト謂フト云ヘルモノ
是レ即チ修ノ本義ナルコト以テ知ルヘキナリ修身ト云ヒ
修学ト云フ皆此ノ謂ナリ

然ルニ仏教ニ在テハ更ニ其義ヲ確実ニシ単ニ修身修学等
ト謂ハス必ス之ヲ修行ト謂フ行ノ一字以テ其義ヲ向上セ
シムルナリ夫レ学ハ或ハ典籍ノ文ヲ読ミ或ハ師友ノ言ニ
聴キテ而シテ其ノ理趣ヲ知り其ノ意義ヲ明ラムルノ謂ナ
リ然ルニ今行ト謂フハ其ノ既ニ能ク知り能ク明メタルノ
理義ヲ実地ニ履踐スルノ謂ナリ故ニ仏教ニ於テハ単ニ修
学ト謂ハスシテ必ス修行ト謂フ所以ナリ

中ニ就ク禪祖ノ如キハ証上ノ修ト謂ヒ悟後ノ修行ト謂ヒ
又修ノ外ニ証悟ヲ待ツヘカラスト謂フニ至ル修養ノ本義
是ニ於テ極マレリト謂フヘキナリ今諸君ハ既ニ其ノ学ヲ
卒業シテ將ニ実行ニ就カントスルノ時ニ際セリ庶幾クハ
修学ト修行トノ径庭相距ルコト頗ル遠キヲ明弁シ修学ハ
一時ニシテ修行ハ永久ナルコトヲ賤知シテ旦夕眠食ノ作
業モ亦皆神仏聖賢ノ大道実現ナルコトヲ等閑ニスルコト

ナカランコトヲ祝福ノ至リニ堪ルコトナシ

衆慈久立珍重

大正五年三月三十日

東洋大学長 大内青巒

『東洋哲学』第二三編第四号（大正五年四月一〇日）

四六七 私立哲学館称号授与式館主井上円了演説

（明治三十六年九月一六日）

先に歐洲を巡遊して米國に至りハーバート大学の卒業式
に臨み、其出身者の大學を出てたる以後の学力功勞に対
して其名譽を表彰せんが為或はエルエルデー或はエムエ
ー等の學位を授与せるを見たり、我國に於ては學校の課
程を了れるものに卒業証書を与ふれども、學校卒業以後
の学力功勞に対して何等の待遇をなさざるは一大欠点な
りといはざるべからず、蓋し學校の卒業は実は卒業と名
くべきものにあらざして社會に出てんとする第一の階級
のみ、本館は創立以來出身者の數殆と二千人の多きに上
り、其中には或は教育に、或は宗教に、或は著述に、或
は講学等種々の業務に従事し其学力功勞若くは其名望
の世に著はるゝもの尠からず、依て本館は之に對して待
遇法を設けんと欲し、称号規程を設けたり、其規程に従

ひ推薦会を開き、名誉講師、講師、得業に推薦すべき人を選定せしが、今回の授与式には名誉講師を欠き他日講師中より更に推薦することに決議せり、今回当選の講師及び得業中には其業務の何たるを問はず、専ら社会に於ける名望又は功労等を標準として定めたるものなり、或は在館中の成績又は本館に対する功労等を参照して定めたるものあり、然れども尚推薦委員に於て出身者の現情を熟知せざる者少からざれば推薦に漏れたる人もあるべし、或は得業に推薦したる人の中には講師に推薦するの至当なる人もあるべし、此等は更に次回に於て推薦すべきを以て、出身者中にて候補者に選定すべき見込の者あらば誰にても其履歴を記して本館幹事へ宛申込むべし、幹事は之を次回の推薦会に提出すべし云云

『哲学館称号授与式及学年始業式』（『東洋哲学』）

第一〇編第一〇号、明治三十六年一〇月五日）

第二章 創立式典

第一節 式辞・祝辞

四六八—— 私立東洋大学創立三十周年記念式典

大内青巒学長式辞

〔大正六年十一月一日〕

三十年ヲ以テ一世紀ト為スハ我が東洋古來ノ風格タルコトハ世學ノ形象タル三十二從ヒ一ニ從フヲ以テ之ヲ知ルベキナリ本大学創立以來茲ニ三十年即チ是レ創業期□^{〔二〕}第一世紀ヲ經過シテ更ニ將ニ守成期ノ第二紀ニ入り愈々益々發展更張ヲ要スルノ佳期ヲ迎ヘントスルニ至レルナリ是ニ於テ曾テ業ヲ本大学ニ修メタル諸君ノ發起ヲ以テ勸立記念祝賀会ヲ開催スルコトヲ得タル真ニ是レ本大学ノ一大盛事ト謂フベキナリ。願ルニ既往三十年間本大学

ハ偏ヘ治朝野大方ノ推挽ト教授諸師諸君ノ督励トニ憑テ無慮三千有余人ノ人材ヲ治出シ^{〔三〕}頗ル国家社会ニ貢獻スルコトヲ得タルヲ以テ往年既ニ

先帝陛下特ニ勅シテ金員ヲ賜フ光榮ヲ荷ヒ今復タ

今上陛下至仁ノ教旨ヲ以テ更ニ賜金ノ恩寵ヲ蒙ルコトヲ得タル是レ當ニ本大学學榮譽ナルノミナラズ實ニ東洋文教ノ一大進運ト謂フベキナリ茲ニ本大学勸立三十年記念式ヲ挙ルニ方リテ一言以テ既往ヲ賀シ且ツ將來ヲ祝スルコト爾リ

大正六年十一月十一日

私立東洋大学長 大内青巒

「本學三十周年記念式典」〔「東洋哲學」

第二四編第一一號、大正六年二月一〇日〕

四六八—— 二

私立東洋大学創立三十周年記念式典

文部大臣岡田良平祝辞

〔大正六年十一月一日〕

東洋大学創立三十年記念ノ式ヲ挙グルニ方リ 天皇陛下特ニ内帑ノ資ヲ本大学ニ下賜セラレ其ノ學事ヲ奨励シ給フ是一ニ 陛下淳ク教學ノ事ニ軫念アラセラルルノ余ニ出ヅル所本大臣ハ此ノ聖旨ヲ拜シテ恐懼感激ニ勝ヘズ。

顧フニ文学博士井上田了君が曾テ東洋哲学ヲ主トスル哲理専攻ノ學舎ノ備ラサルヲ慨シ肇メテ哲學館ヲ興サレシヨリ其ノ組織ニ変革アリ當局時ニ其ノ人ヲ更ヘタリト雖モ設備内容年ヲ逐フテ完備シ独リ力ヲ専門學者ノ教育ニ致シ又國家ノ為ニ教員ノ養成ニ尽スコト多大ナルノミナラズ或ハ講義録ヲ發行シ或ハ講習會講演會ヲ開催シテ斯學ニ関スル知識ノ普及ニ資スル等其ノ成績頗ル顯著ナルモノアルハ夙ニ世ノ認ムル所タリ今ヤ本大学ノ同人諸氏相謀リテ愛ニ記念ノ式ヲ挙ゲ既往ヲ追憶スルト共ニ更ニ將來ノ發展ヲ期セントス顧フニ東洋哲学ノ發達ハ將來本大学ノ力ニ俟ツモノ多シ本大学ノ職員諸君及學生諸子が同心戮力今後尚一層ノ奮勵ヲ加ヘ以テ帝國學術ノ進歩ニ貢獻スルハ蓋シ世ノ期待スル所ニシテ亦優渥ナル聖旨ニ酬イ奉ル所以ノ道タラズンバアラズ。

余曾テ教鞭ヲ本大学ニ執ル本日ノ記念式ニ方リ衷心寔ニ今昔ノ感切ナルモノアリ乃チ一言冀望ヲ述ベテ祝辭トナス。

大正六年十一月十一日 文部大臣 岡田良平

「本學三十周年記念式典」(「東洋哲學」)

第二四編第一号、大正六年二月一〇日

四六八—三 私立東洋大学創立三十周年記念式典

顧問石黒忠憲祝辭

〔大正六年一月一日〕

文学博士井上田了君ノ創設セル哲學館ハ種々ノ事變ト戰ヒ、絶ヘザル進展ヲ経テ、哲學館大学ト称シ、更ニ東洋大学トナリ、今此ニ三十周年記念祝賀式ヲ舉行スルニ至レリ、抑本學創立ノ主趣ハ東洋ノ學術道德宗教ヲ闡明スルニ在リテ、其卒業生ハ、已ニ殆ト社会ノ各方面ニ分布シ、其主要部分ヲ形成シ、各剛健堅実、躬行實踐ヲ以テ範ヲ社会ニ垂ントス、特ニ本邦教育宗教ノ方面ニ於テハ、本學ニ負フ所極メテ多シ、現代ニ於ケル、本邦ノ道德教育宗教ニ生面ヲ開キ得タルモノ、本學大ニ与テ力アリト謂ツ可ク、余輩名ヲ本學ニ列スルモノ、思フテ此ニ至レバ中心欣快ニ堪ヘザル所也、余輩ハ將來ニ於テモ亦タ猶如此ナル可キヲ信シ、從來ノ理想ヲ改ムルコトナランコトヲ希望ス、余輩ハ本大学ヨリ所謂大政治家ノ出デンコトヲ希ハズ、又所謂大実業家ノ出デンコトヲ希ハ

ズ、唯切ニ剛健堅実実践躬行、以テ一郡一村ニ師表タルニ足リ、以テ一郷一都ニ導師タルニ足ルノ教育家宗教家ノ輩出センコトヲ中心切ニ希フモノナリ、国家運命ノ一大部分ハ、実ニ繫リテ此等ノ人人ノ双肩ニ在ルモノナリ。

曩ニ明治三十年、本大学ノ事業

天聴ニ達シ特ニ内帑ヲ下賜セシメ給フヤ、学長井上博士深ク聖恩ニ感激シ、恩賜ニ資リ国家有益ノ事業ヲ經營シ、以テ聖恩ノ万一ニ報シ奉ラント、遂ニ胥議シテ、中学校ヲ創立ス、今ノ京北中学校是也、尋デ京北幼稚園ヲ設立ス、後井上学長退隠スルニ及ビ、前田学長、大内現学長、湯本中学校長、各其志ヲ継紹シ、東洋大学財団ヲ組成シ、其發達改善ニ努メ、更ニ京北実業学校ヲ創立シ、本学財団ノ事業益々拡張シ、国家ニ貢獻スル所益々大ヲ加ヘタリ、今又三十周年紀念祝賀式ヲ举行スルニ際シ、聖旨特ニ内帑ヲ下賜セシメ給フ。

天恩ノ優渥ナル、何ノ辞ヲ以テカ謝シ奉ル可キ、随テ我東洋大学ノ報シ奉ル可キ所以、更ニ重且大ナリト言ハザル可ラズ、而シテ是又実ニ剛健堅実、社会ノ中心トナル可キ、教育家、宗教家ヲ養成輩出セシメザル可ラザル所以ナリ。

余モト井上博士ト久シク相識リ、又本学顧問ノ班ニ列ス、今ヤ三十周年紀念祝典ニ際シ往年ヲ憶ヒ、来茲二期シ、

其感ニ堪ヘザルモノアリ、乃テ一言ヲ述テ祝シ且規ス。

大正六年十一月十一日

東洋大学顧問 男爵石黒忠憲

「本学三十周年記念式典」(『東洋哲学』

第二四編第一号、大正六年二月一〇日)

四六八—四 東洋大学創立三十周年記念祝賀会

大内青巒学長祝辞

(大正六年十一月一日)

三十年一世紀の説

大内青巒

我が東洋大学は、本年恰も創立以来三十年に当るを以て本月十一日をトして、盛に記念祝賀の典を挙ぐることになれり。近來、何事も皆西洋の風儀に随逐して、一百年を以て一世紀と為すものに似たれども、我が東洋に於ては然らず。古來、三十年を以て一世と為すことは、夫の論語に「必ずや世にして仁」と云へるを、其の注に「三十年を以て一世と為す」と明記するを以て知るべきなり。其れ然り、夙に東洋学の更張を以て主義と為す所の本大学に於て、其の創立以来三十年を以て第一世紀と爲し、更に明年以後、三十年を経る毎に、第二世紀、第三世紀と奎運を發展せしめ、以て千万世紀に至るを期す

るは、誠に能く其の当を得たるものと謂ふべきなり。殊に予が如きは、本大学の初め哲学館と称して湯島麟祥院に於て開校式を挙げたる時に出席して一場の祝辞を演へたる以来、更に駒込蓬萊町に移転しての開校式にも又当小石川原町に位置を定めたる時の開校式にも、皆必ず出席して、其の進歩発展を慶賀したる重々の宿縁醇熟して、今や乏しき承けて学長の名義を帯ぶるに當りて、此の創業第一世紀を送り、更に守成の第二世紀を迎ふるの佳運に遭遇したる、何の喜びか復た之に加へんや。聊か蕪辞を修めて祝意を述ぶる所以なり。

『東洋哲学』第二四編第一〇号（大正六年十一月一日）

四六八—五 東洋大学創立三十周年記念祝賀会

井上円了所感

（大正六年十一月一日）

東洋大学創立三十年記念祝賀会所感

井上円了

創立者たる老生に於ては其所感無量無尽海の如く山の如くなるも昨今地方巡講中にて朝講夕演寸隙を許さざる際なれば遺憾ながら僅々數行を記述するに止めなければならぬ。明治二十年九月始めて哲学館を創開せしより其

前後内助外援せられたる人頗る多い其中に就きて内助者として特筆すべきは寺田福寿氏である又外援者として大書すべきは勝伯と加藤弘之男の両先輩である。然るに此三名ともに今は隔世の人となられて紀念会に相見るを得ざるは何んとなく今昔の感に堪へぬ次第である。願くは此紀念会を其墓前に於て報告したいと思ふ。

『東洋哲学』第二四編第一〇号（大正六年十一月一日）

四六九—一 東洋大学創立四十五周年記念式典

高楠順次郎式辞

（昭和七年十一月二三日）

東洋大学創立四十五周年記念式式辞

学長 高楠順次郎

毎年紀念の日に於て井上博士の学府創立の時代を想起せしめらるゝのである、殊に今年には已に四十五回の紀念日に遭遇して當時を想起するは一層意義あることである、四十五年以前の哲學家はまだ出発も十分に出来ない時期であつた帝国大学の哲学科は井上博士^{〔七〕}一人の卒業者であつたと云ふことである、哲學家の出発期が此の如き光景であるのみならず仏教家は沈滞の極に達して居つた此時に於て東西洋の哲学を対象として学府の礎石を築か

れたことは我々国民の感謝して惜かざる所である。^{〔情〕}

爾来本学府は幾多の卒業生を出し教育家に、宗教家に、研究家に、多大の貢献をなしたことは何人も否むことは出来ないであります。

然るに本学府は内容の充分充実に係らずその外形に於てはまだ完成して居ないのであります、人間で言つたらその身体が満足に出来上つて居ない学府の中心たる講堂は全学生の三分の一をも入ることが出来ない、その不便を最も痛切に感じた学生諸君より大講堂建築の発願があり遂に我々も之の止むを得ざるを看て之の非常時、財界荒涼の時代をも顧みず茲に講堂の建築を決心したわけであります、臨場の文部当局の方々来賓諸彦に置かせられても十分にこの微意をお酌とり下さいましてこの目標を□成せしめられんことを切望の至りに耐えないのであります。

今日の記念日を以て大講堂建築の発表日としたことはその当を得たものか否かは疑問であるが四十五年の紀念式に單なる賑はしに終らしめない為め殊に御挨拶に代えてこの意義ある発表を致しました所以であります。

『東洋大学々報』第一一号（昭和七年一月二五日）

四六九—二 東洋大学創立四十五周年記念式典

文部大臣鳩山一郎祝辞

〔昭和七年一月二三日〕

文部大臣祝辞

本日茲ニ東洋大学創立四十五年紀念祝賀式を舉行セラ
ル、ニ當リ一言所懷ヲ陳ブルヲ得ルハ余ノ欣幸トスルト
コロナリ。

抑モ本大学ハ明治二十年文学博士故井上田了氏ノ創業
ニ係リ主トシテ神儒仏三道ノ東洋哲学ニ基キ銳意東洋文
化ノ發揚ニ勉メ以テ道義ノ作興風教ノ振起^{〔三〕}貢獻セシト
コロ蓋シ鮮少ニ非ズ爾来学風年ト与ニ隆昌^{〔三〕}に趣^{〔キ〕}基礎月
ト共ニ固キヲ加ヘ以^{〔テ〕}今日ノ盛ヲ致セルモノ独リ斯文ノ
為ノミナラズ邦家ノ為メ慶賀措ク能ハザルトコロナリ是
レ偏ニ昭代ノ恵沢ニヨル固ヨリ其ノトコロナリト雖モ又
實ニ關係諸賢ノ教導經營其ノ宣シキヲ得タルノ賜タラズ
ンバアラズ余ハ本日ノ慶典ニ際シ本大学四十五年ノ過去
ヲ顧ミ先人苦心ノ跡ヲ忍ビテ軫タ感慨ニ堪ヘザルト俱ニ
衷心ノ祝意ヲ表スルモノナリ

冀クハ職員諸賢並ニ学生諸子深ク本大学設立ノ趣旨ニ
稽ヘ現下中外ノ情勢ニ察シテ夙夜匪懈益々邦家進運ノ根

抵ヲ培養スルニ寄与セラレンコトヲ記念ノ式典ニ方リ聊
カ希望ヲ述ベテ祝辞ト為ス

昭和七年十一月二十三日

文部大臣 鳩山一郎

『東洋大学々報』第一号（昭和七年十一月二五日）

四六九—三 東洋大学創立四十五周年記念式典

校友総代安藤正純祝辞

（昭和七年十一月二三日）

祝 辞

校友総代 安藤正純

私は御承知の通り非常に忙しい身であります、本日は小閑を得ましたので皆様の御勧めに従ひ此の祝典の席末を汚した次第であります。

そふして校友を代表して祝詞を陳べよとの御命令でありますから此れにも従ひました。

私は此の学校の前身哲学館に学び一面早稲田大学にも通ひました、此の学校は卒業して居りませんが早稲田の校友として早稲田大学から種々の会合に出よと言つて参りますが、私はどうも早稲田より東洋大学の方へ引きつけられます、此れは御承知の大隈さんは、早稲田の総長でありましたが学校へは余り顔を出さず、政治其他の事に

奔走して居りましたが井上先生は必らず一日に一回は学校で学生に会ひ教授訓諭をなしその上特に必要と認めらるゝ時は個人を呼んで訓戒せらる等非常に学生と先生の間が親密でありました、私が通学して居ります時は学校は駒込にありまして先生の御宅も学校内にありて学校へ出ない時でも書斎の窓から校庭を眺めて学生の動静を見守つて居られました、此の親しさが私を引き付けるのでありませう又一面先刻高楠学長及び井上先生の仰せになりました通り円了先生の人格が私を精神的に早稲田以上に引き付けるのであります。

私の通学して居りまた時と今日とを比較して見ますと全く隔世の【感が】があると云ふても敢て差支がない程隆盛になり、私立大学としては慶応早稲田の次には東洋大学と云へるのか云へないか知らないがその内容に於ては、慶応早稲田は出身者からボツ／＼大臣も出しかゝりましたが、此の学校はまだ大臣を出して居りません、或はなりかゝつて居る者は一人や二人あるかも知れませんが、併し大臣と言ふ者は偉い【界】□かそれも分りませんが慶応は財□の有力者を出して居ります、早稲田は種々の人が多方向に多数出□居ります、即ち、慶応は實に於て早稲田は数に於て各特色を持つて居ります。

此の学校は数に於ても實に於ても或は慶応早稲田に攘

るかも知れませんが大臣や実業家の俗物でなく精神的方面の教育界に多くの人を送つて居ります併し余り偉い教育家はありませんがその奥にある宗教家には幾多の人材を送つて居ります、宗教界の管長と言ふ者が果して偉いかと云ふ事は疑問でありますが一宗一派の牛耳を取る管長は私は調べたのではなく、今此の席へ参りまして祝詞を陳べよと云われてから後に居られる石川義昌君に聞いたのでありますが、先づ此の席に居られます加藤精神君を始め井村日威君、富田敦純君、神崎一作君、三宅英慶君物故せられました、本多日生君等私の今記憶して居ります丈でも六七名も管長を出して居ります。

官公私立大学多しと雖も此れ丈の管長を出した大学は東洋大学の以外には絶対ありません、此の点に就いては慶応、早稲田に敢て遜色なしと云ふべきであります此れは創立者たる井上円了先生の人格の然らしむる所であります却又円了先生に就いて歴代の学長即ち前田、大内、境野、岡田、中島、現在の高楠の各先生が円了先生の精神を受け継いで御尽力下されたのと教職員亦た協力一致創立の趣旨を維持せられたるに依る賜と深く感謝の意を表する次第であります。

我が国現在の大問題は何んと云つても満洲問題であります、此の満洲開発の成不成に依つて我國の運命が定ま

ると申してもよいと存じます。

此の満洲開発には政治経済を始め即ち慶応、早稲田の特色を発揮せしむる幾多の仕事もありますが、満洲建国の精神が東洋思想の王道にあります、東洋思想の学府たる此の大学は重大なる使命を持つ者であります。

即ち、物質的方面の開発と共に精神的方面特に教育宗教方面に対しては此の学校の出身者に期待する所が少くないのであります。

諸君は一層御勉強の上此の期待に副ふべく本大学の発展を希望して祝詞に代える次第であります、

尚ほ一言付け加へて置きますが、先刻高楠学長は大講堂建設に就いて講堂は身体と云はれましたが、身体に相違ありません、此の身体は健康体であらねばなりません、然るに此の講堂を作り出す校友会が現在の如く手は足は足、支離滅裂では健康な身体、即ち理想的講堂の出現は困難と思ひますから、先づ以て此の際従来感情を一掃して協力一致健全なる身体たる大講堂の建設せられん事を希望してやまざる次第であります。

私も微力ながら、諸君の驥尾に附ひて、時間の許す限りの尽力を吝む者でありませぬから、先づ校友の大同団結を計る事に就いての御尽力を御願ひ致します。

(以上は当日速記を致しません^{〔口で〕}したから記憶をたどつ

てその要を掲載致しましたので文責記者にあります】

『東洋大学々報』第一一号（昭和七年一月二五日）

四七〇 東洋大学創立五十四周年記念式典大倉

邦彦学長挨拶（昭和一六年一月二三日）

記念祭に当り、亦新嘗祭に当り本日は誠にめでたい日です。誕生日は新生活に於ても、此の日を卜して、自分の生れてより過去数数の御恩にあづかつた親の恩に感謝し、現在までを振返つて感謝して、亦将来を考へる日です。

本学に於ても永い間に度々の記念祭を迎へて来ましたが、既に年も五十幾歳になると、人生の半ばを過ぎてゐますが、此の發展をする大学では未だ青年です。そして此れ迄の間に数多の卒業生を送り、亦色々な愉快な事もあつた。唯本学のやつて来た仕事は地味なので世の中の目につかなかつた。明治外交の様に華々しく目につくものに對して一方精神立法は目につかない。丁度走つてゐる汽車は見るが、その下のレールを忘れてゐる様なものです。此のレールの様に教育宗教と云ふ基礎が無ければならないが、世間の目はそれを世の後に置いたからにはえないで、本学もある時は極めて衰退した時もあります。

草木の根は冬土中に籠つてゐるが、やがて伸びる春への用意をしてゐるのです。然し枯れてしまふ事もある様に、大学でも学力実力を培つてをらねば、東洋の卒業生は駄目だと云ふ評判が立つて学校が潰れてしまふ。卒業生の活動がやがて学校に反映するのです。

私が参りました時に、此処を雞声台と名付けられたのは実に井上先生の達見だと思ひましたが、此れは先生のつけられたものでないと後に知りました。それは、私の友人が此の名は知らぬだらうと話して呉れました。此れはもと雞声の窪と云ひ、將軍が狩に出た時、丁度此の当りに来ると曉になり雞の鳴声が聞える。そこで低い処に此の名をつけた。井上先生が高い台へ学校を創られたので此処を雞声台と云ふ様になつたのです。

此の台上の叫びは諸君が叫びつつある声であつて、それは個人主義的自由主義的なものであつてはならぬ。氣迫がなければならぬ。学内の生活は学風内容と共に氣迫が大事であります。台上の叫びは国家百年の大自覺を持つてゐる者の叫びであらねばなりません。そうすれば人は何うしてゐてもかまはない、自分一個の態度を守つてゐればよい、と云ふ様な消極的な態度は無くなる筈です。日本臣民は、帝國を最もよくして行く為に己を捧げねばなりません。東洋大学に於ても亦然りです。臣民と

云ふ性格を持つた学生で満たされねばなりません。此れが建学の精神に合致するのです。

時恰も時局は非常な大きな動きをして来ました。私は多年行学一致を叫んで来ましたが、時局もある一つの要求から行的方法をやらねばならぬと云ふ様になつて来ました。そうして第一線に立つて政治経済を以て働くのも井上先生の眞の精神と考へ、拓殖科を作りしました。又今年は経済教育科を作り亦学内の施設、学科内容も時代に則^レ応してやつて来ました。今日は記念日だから、私は色々な話をする事を許されると思ひますが、本学は貧乏だと皆云ふ。然し今はもう学校の経済も完全に独立しました。親の貧乏なのを子供は心配しますが、本年は相当裕福になり、貯蓄も出来る様になりました。亦十一月四日には、既に永年本学が大学となつてから許されなかつた学位論文の規定が認可されました。亦諸君にとつて喜ばしい事は、教員検定が九十九%許可された事です。だからと云つて勉強せねば学校の不名誉となる。皆ががつちりと手をくんで、よくない事をしうな時は皆で止めねばいけない。あれが何をしようと、といふ様は個人主義^{〔五〕}はいけない。学内は連帯責任であります。学校は先生のみならず俱学俱進、学生ものしかゝつて行かねば立派なものにはならない。憤^{〔六〕}せざれば敬せず、と云ふ氣で励め

ば、先生も氣が沸き立つ。職工でもあんな事をしないと云ふ様な教場があれば、それは諸君自ら改めねばならない。井上先生にかはつて云つて置きます高い理想に一步步々進まねばならない。

記念日に当り諸君と約束をしたと思ひます。度々云ふが度々聞かない。今更何を望んでゐるか聞く必要は無いが、学則を守る事です。此れを守らないで偉い様^{〔七〕}に思つてゐるのは間違ひです。先生が一一巡査の様に廻つて歩く必要がありませうか。

在學生は勿論、卒業生に云つておき度い。各々が心の中に考へてくれるのが眞の記念日であります。素直な氣になつて大学を省る日に本日をしたと思ひます。色々お話して来たのも此の意味であります。国家の為に身を挺してやつてゐる先輩を思ひ、而も学内の過現未三世に互つて為すあらんとの一日を能く味つて行き度いと思ひます。

「星霜此処に五十四年 歴史を籠むる創立記念日の盛儀」
 『東洋大学護国会々報』第四号、

昭和一六年二月三〇日

東洋大学創立五十周年記念歌

正富汪洋詩
杉山長谷雄曲

四七一 東洋大学創立五十周年記念歌 (昭和十二年二月)

第二節 記念歌

世 の し の め に た かーだ か と

こ こ く あ い り の こ ゑーあ げ て

文 化 の あ か つ き み ち び けー る

鶏 声ーだーい の ひ かーり は も う つ く し き よ

し あ ま ね し こ れ 東 洋 の か が や き

一

世の黎明に高々と
護国愛理の声あげて

文化の暁導ける
声鶏台の光はも

うつくし 清し 遍し

これ 東洋の かぎやき

二

それ東よりあらはれて
偉大感化の けふなほも

顕著のひじりを学びては
新聖代の光とぞ

いさまし雄々し若々し

これ 東洋の かぎやき

三

観よこしかたをこの後の
世界文化をきはだてむ

学徒の力をかぐはしき
創造性を いそしみを

逞し 強し はれぐし

これ 東洋の かぎやき

『思想と文学』第三卷第二冊

(昭和十二年二月二三日)

東洋大学創立五十周年記念歌

正富汪洋

四七二 東洋大学音頭 (昭和十二年一月)

東洋大学音頭

河西新太郎詩
杉山長谷雄曲



東洋大学音頭

白山台から朝霧晴れて(ヨイト)

はるか希望の富士ヶ嶺仰ぎや

若いわれらの

(若いわれらの)理想も高い

ハ、ヨイトコネ、ヨイトコネ

ア、東洋大学ヨイトコネ

大和美し万葉の桜(ヨイト)

燦と輝く東洋思想

今こそ匂へ

(今こそ匂へ)世紀の風に

ハ、ヨイトコネ、ヨイトコネ

ア、東洋大学ヨイトコネ

歴史は古く人去り行けど

(ヨイト)

今またここに集へるわれら

雄々しく時代の

(雄々しく時代の)花とや咲かむ

ハ、ヨイトコネ、ヨイトコネ

ア、東洋大学ヨイトコネ

河西新太郎

意気と熱とのカレッツデライト

(ヨイト)

白山台上紅顔照らす

大日輪の

(大日輪の)恵みも豊か

ハ、ヨイトコネ、ヨイトコネ

ア、東洋大学ヨイトコネ

亜細亜の山河に文化の光り

(ヨイト)

導き来れる務めは重し

永き權威を

(永き權威を)地にぞ落すな

ハ、ヨイトコネ、ヨイトコネ

ア、東洋大学ヨイトコネ